



尾原 蓉子氏

IFI [ファッション産業人材育成機構]
IFIビジネス・スクール 名誉学長



紹介者

松井忠三氏
良品計画取締役会長

「実学」に挑戦した十余年 ——教育とは人の心に火をつけること

#142

『実学』をかかげ、ファッション産業に特化した「大学院レベル」の教育機関が1998年に開校。その準備期間から16年間、チャレンジングな仕事に取り組ませていただき、10年にわたる学長職をこの3月末で卒業した。

日本に例の少ない社会科学系での「実学」を「高度職業人養成」の「専門職大学院」制度ができる前から始めたのであるから、まさしくこの世界のパイオニアであったが、反面、試行錯誤の連続でもあった。ファッション産業という、変化も競争も激しく、かつ成熟した産業は、いわば課題先進産業であり、そこでの人材育成も多様な課題への挑戦であった。

『実学』の理念は、初代理事長の故山中 鎮氏が福沢諭吉の「学問のすすめ」からとられたものだ。福沢翁の「実学」は、「事物を観察し、その道理を推究すること」、「物事の道理を推究して自分の説を作ること」、そして「学問したものはこれを実施すべきこと」を強調する。「実学」といえば「実利実益」と考えられがちだが、「実証実験」、「実践実行」が伴って初めて本物の「実学」ということである。事物をよく観察し、自分で考え、研究・実験し、それを実行に移して結果を得て初めて、学びの目的が達せられる。

アルベルト・アインシュタインは、「実学」とは正反対の世界と思われそうな理論物理学者であるが、彼は「教育とは学校で学んだことをすべて忘れた後に残っているもの」といつている。その意味は「教育とは、色々な知識や技能を教えることによって人間が本来持っている知恵、知性といったものを磨き、新たな発見・創造を導くことであり、決して知識やスキルを教えることそのものではない」ということだ。これもまさしく「実学」である。

いま時代が大きく変容し、未知の、かつ教科書もない世界で、世界の強豪と闘うためには、一人一人の人間がもつ知恵や知性を磨き、自発的で創造的な問題解決あるいはイノベーションを起こす風土と考え方、そして人材の開発が不可欠である。

開校以来、若者から企業幹部までの人材育成に携わりながら、「教育とは人の心に火をつけることだ」と痛感している。火さえつければ人は自ら燃え上がり、驚くような成長を遂げる。この10年間それをこの目で見て、体感してきた。アインシュタインの言葉、「独創的な表現と知識の悦びを喚起させるのが、教師の最高の術である」を噛み締めながらの十余年であった。

次回は **林野 宏氏** (クレディセゾン 取締役社長) にご登場いただきます。